

胃と腸の臨床病理ノート

〔著〕 元 国立がんセンター病理部 佐野 量造

東京医科歯科大学第1外科

村 上 忠 重

佐野君が逝って1年経つ。早いものである。ところが、なくなられてからこの臨床病理ノートが計画され、でき上ったのだという。しかもそれは佐野さんが書こうとして残した原稿があったわけではなく、大部分学会や講演会で話したものをまとめたものだという。聞いてこんなに驚いたことはない。

〇〇先生講演集というものが時に人の死後出版されることはある。しかしこのノートは単にレコードしたテープを速記したものではない。見れば分かるように、文章より標本の写真やシェーマの方が多のである。どうしてこんなことができたのか？

それにはまず先生の講演会の度毎に随いて行って、単にレコーダーで声を記録しただけではなく、スライドの出たスクリーンをすべてスナップ写真に収めた人々がいた。いな収めずにいらなかった人々がいたのである。教室をもっていて教授におさまり、先生と弟子という関係ができ上っている社会では、弟子は決して先生にそんな風には接しない。弟子は何時でも先生の話の聞けると思っている。また時には先生は弟子の作った標本を借りて行って講演をする。だから1枚1枚のスライドを記録するなどは思いもよらず、ああまた先生は今夜もバイトをやっているなと思っている。先生が死んでからどのスライドをどんな順番に使ったか

が分かるはずがない。

実は佐野先生が話をされるとなると、千里の道を遠しとせず、毎月のようにその下に集まった佐野学派があったのである。その話はうすうす聞いてはいたが、この本がそれらの信奉者達の努力によってできたと聞いて、はじめてその実在を目のあたりに見たような感じがした。恐ろしいことが起こったものである。私どもは中学や高等学校で論語というものを悩まされながら読まれた。論語は中国の聖人とされる孔子が自分で著わした本ではなく、その言行を弟子達が死後思い出して忘れないようにと書き集めたものだということであった。正に何千年昔の論語の奇蹟がこの昭和の時代に起こったのである。今もなお同様に残ってはいても、残そうとして書いた親鸞のお文様とは根本的に違うものなのである。いな、いわばキリスト教の聖書や仏教の仏典に当るものである。大袈裟かも知れないが聖典の1つと言わざるを得ない。あるいは又、学徳とはこのようなことを意味するのであろう。それだけこの書には故人に対する愛情が溢れ、追憶がなまなましい。同時に説得力を持ち、従って理解しやすいものになっている。

恐らく佐野さんが生きていたらこの本はでき上っていなかったであろう。同じような図譜の形で胃の病理を自分で出版されたものがあるか

ら、あるいはその第二弾として腸の病理までつけ加えた本を書きたいと思っただけであつたかも知れない。しかし本を自分の名前で書こうとすると、1行1行書きつかえるものである。「である」とするか、「であろう」とするか、「と思われる」とするか、語尾ひとつに気を遣う。したがってこんな大冊の本を忙しい生活のさ中に書き終えられるものではない。それができたのは、「である」と信じてくれた信者達があつたからこそこの話である。こんなに有難いことはない。消化器の病理の世界に昭和の奇蹟が起こったのだと受取れる。この本は従って長く長く信者を得て売れつづける運命をもつに違いない。

内容について少し触れておく。前回の「胃疾患の臨床病理」図譜より、カラー写真が減り、白黒が増えた結果、かえって所見が見易くなった。いたる所に佐野君特有の物の考え方がにじみ出ている。これはその押え手がいなかったせいである。その点きわめて結論が簡潔で理解し易い。腸の部分では大腸ポリポージスに力が注がれていて面白い。

あの世で佐野君が、どうだい村上さん、この真似は一寸できないでしょうと、得意のポーズで微笑んでいるような気がする。

B5判 頁306 図114 写真293 原色図42
色図1 1977 ¥14,000 円300
医学書院刊